

6. 妊娠糖尿病の病態解析

研究課題名

妊娠糖尿病の病態解析

—インスリン治療を必要とした妊娠糖尿病患者の予測因子の解析と妊娠糖尿病患者の分娩後の耐糖能についての後ろ向き解析—

研究の概要

妊娠糖尿病は「妊娠中に発症もしくは初めて発見された耐糖能低下（血糖値の上昇）」と定義されています。近年本邦では、女性のライフスタイルの変化に伴い晩婚、晩産化が進んでいます。加えて2010年に妊娠糖尿病の診断基準が変更になり、妊娠糖尿病患者数は約3～4倍に増加しています。他の医療機関における調査研究によると、その頻度は全妊婦の12.08%になると報告されています。妊娠糖尿病は、たとえ糖尿病の程度が軽度であっても巨大児など、周産期の様々な合併症のリスクとなります。従って、妊娠糖尿病では厳格な血糖管理が必要です。血糖管理法としては、適切な食事療法が中心となりますが、食事療法で血糖管理目標が達成できない場合には、積極的にインスリン治療を行う必要があります。

一方、妊娠糖尿病と診断された女性は、将来の2型糖尿病発症のハイリスク群でもあります。さらに、一度妊娠糖尿病と診断された女性では次回妊娠時においても妊娠糖尿病を発症する可能性が高いことも知られています。従って、妊娠糖尿病と診断された女性は、産後早期（産後6～12週時）に、糖尿病が改善しているかを調べる検査を受けることが推奨されています。

今回当院、糖尿病内分泌内科では、当院に受診歴のある妊娠糖尿病の患者さんのカルテのデータを解析し、下記の2つの後ろ向き解析を行います。

1. 食事療法のみで管理を行えた症例とインスリン治療が必要となった症例を比較検討し、インスリン治療の必要性を予測する因子がないかを調べます。
2. 産後に施行した糖負荷試験の結果を解析し、妊娠糖尿病既往女性の非妊娠時の耐糖能について、その特徴を調べます。

なお、研究に関係する全ての医師は、厚生労働省の示している「臨床研究に関する倫理指針」に従って本研究を実施します。また、いかなる場合においても、研究に参加した患者の氏名、住所などプライバシーに関わる事項は一切公表しません。

研究成果については、学会、論文などでの発表を予定しています。

研究代表者

糖尿病・内分泌内科部長 西川武志

共同研究者

糖尿病・内分泌内科医師 小野恵子、橋本章子、木下博之、荒木裕貴